東京芸術祭2019 芸劇オータムセレクション

「三人姉妹」レッドトーチ・シアター
「BLIND」デューダ・パイヴァ

「三人姉妹」
Photo:Frol Podlesny

目を懲らし、耳を澄ませて体感する

**ヨーロッパをどよめかせている
レッドトーチ・シアター（ロシア）の手話による
「三人姉妹」と、失明体験に基づくダークな
パペット・ファンタジー「BLIND（ブラインド）」が初来日！**

2016年5月のウィーン芸術週間（アヴィニョンやエディンバラと並ぶ歴史と規模を誇る国際芸術祭）で出会った「三人姉妹」は、あまりにも鮮烈だった。事前に知り得たのは、"シベリアの劇団による手話の「三人姉妹」"という情報のみ。ろう者、あるいはろう者と健聴者が混在した俳優による、手話の舞台ということだろうか。経験則から、そんな想定をしながら席に着いた。

舞台では、耳の遠い老人役であるフェラポントが声を出して話す以外は、全員が手話で会話を交わしている。つまり、みな基本的に無声なのだが、イリーナが観るミュージック・ビデオや、マーシャが吹くホイッスル、アンドレイがかき鳴らすヴァイオリン、誰かがテーブルを叩く音、椅子を引く音、食器を重ねる音、時計の秒針や風の音などなど、舞台には過剰なまでに音が横溢していて、非常にかまびすしい。しかも、ドアと家具などの調度品のみが置かれ、壁を取り払った舞台装置のため、大ぜいの登場人物たちの所為が、丸ごと同時に視界に飛び込んでくる。視覚的にも聴覚的にも、膨大な情報量の「三人姉妹」だ。

なかでも目を見張るのが、第三幕。火事騒ぎの後のざわつく深夜、各自の気持ちが昂ぶる場面で、演出のティモフェイ・クリャビンは、突如屋敷の中を停電にしてしまう。漆黒の闇の中、各所でスマホ画面が点灯し、そこにうごめく人々の身体や表情の一部が照らし出される。わずかな手元の明かりを確保しながら、手話で激情を爆発させ、泣き叫ぶ姉妹たち……。

「BLIND」
Photo:PatrickArgirakis

"暗闇の中のろう者"という虚を衝くような発想を、（たぶん）躊躇無く実行に移す演出家もただ者ではないし、圧倒的な集中力とリアリティで、事もなげにそのシチュエーションを演じきる俳優たちにも舌を巻く。そして、次第にわからなくなってくる。この俳優たちはろう者なのか。それとも、ろう者を演じているのか……。

突拍子もない仕掛けで観る者を煙に巻くティモフェイ・クリャビンの「三人姉妹」は、ウィーンで観客の度肝を抜き、ヨーロッパ中の評判となって、このたびついに、日本への初上陸が決まった。事の真偽を、ぜひ直接体感して確かめてみてほしい。

一方、ブラジル出身でオランダを拠点に活動するデューダ・パイヴァは、幼いころに一時的に視力を失ったことがあり、その体験をもとに「BLIND」（blind＝盲目。気づかない、見る目がない、無軌道……と意味は広がる）という作品を創ったそうだ。

大きなランプシェードか、一人用テントのような白くこんもりした物体が、ロープにつながれ床に置かれている。客席で雑談していた男が立ち上がり、それに近づくと、こんもりした物体のてっぺんから、突然スキンヘッドの女性の上半身パペットが現れる。このこんもりは、スカートを丸く広げるために着用する腰枠付きペチコートだったのか。高らかに歌い出す女性は、その場にいる観客の目と耳を一瞬のうちに惹き付けるディーバのよう。

妖艶でいて獣の獰猛さを併せ持つ彼女は、まもなく男の胸元がいびつに膨らんでいることに気づくと、迷わずそこを引き裂いてみせる。苦しむ男の体内からは、なんとエイリアンのような、もうひとりの人間が！　見れば男の身体は胸だけでなく、背中、膝、肩、腰と、そこかしこが、ゴツゴツと隆起している。ということは……。

ちょっと不気味で思索を促すような面持ちのパペットたちに、腹話術の要領で命を吹き込み対峙するデューダ・パイヴァ。マジカルなファンタジーであると同時に、人間の暗部を顕在化させたような、戦慄のパフォーマンスともいえる。五感を研ぎ澄ませて、その場に自分の身を置く必要がありそうだ。

文：伊達なつめ（演劇ジャーナリスト）

「BLIND」（ブラインド）　詳細はHPへ
10月17日（木）～20日（日）
シアターイースト
原案・振付・人形操演：デューダ・パイヴァ
演出：ナンシー・ブラック

「三人姉妹」　詳細はHPへ
10月18日（金）～20日（日）＊上演時間約4時間（休憩3回）
プレイハウス
作：アントン・チェーホフ　演出：ティモフェイ・クリャビン
出演：レッドトーチ・シアター

東京芸術祭 2019 Tokyo Festival 2019

東京芸術祭2019

「暴力の歴史」

演出：トーマス・オスターマイアー

Photo:Brigitte Lacombe

インタビュー　トーマス・オスターマイアー

陶酔、痛み、そして社会にとけこめない悲しみ

今秋ベルリンの名門劇場シャウビューネによる「暴力の歴史」が来日を果たす。演出を担う芸術監督オスターマイアーは「これこそ現代社会に必要な演劇」と語る。

32歳でシャウビューネ芸術監督に選ばれて以来、知性と美意識を備えた演出で勇名を馳せるオスターマイアー。作品はアヴィニョンやシビウなどの国際演劇祭にも招かれ、ヨーロッパのみならずアジアでも人気を博す※1。古典にも現代の問題を織り込み観客を触発する功績で、ヴェネチアビエンナーレ金獅子賞（2011）はじめ多くの受賞に輝いた。戯曲解釈と視聴覚効果の両面に秀でた彼が、舞台化を熱望した小説がエドゥアール・ルイ作『暴力の歴史』だ。

極貧家庭に生まれ「男らしくない」ためにいじめられた少年時代をつづる小説『エディに別れを告げて』（2014／日本語版は東京創元社より2015年刊）で、ルイは注目を集めた。次作『暴力の歴史』ではアルジェリア系のレダにレイプされるエドゥアールを通し、差別が人類に与える影響を問う。

「社会をゆがめる対立を描く『暴力の歴史』は、私たちを囲む危機に気づかせます。エドゥアールを苛む心身の傷が、悲惨な事件の背景と結果を考えさせるからです。ある共同体の多数派の人は、同性愛者や外国人などの少数派を排除しやすい。でも、自分と異なる〈他者〉を疑い恐れることが、人間の尊厳を奪う例は東西の歴史に刻まれています」

たしかに偏見が起こす悲しい事件は、日本でも共有できる問題だ。

「私たちは異文化圏の出身者を受け入れ、自分と同様に複雑な文明と内面をもつ人として認めなくてはなりません。レダの荒んだ態度には、移民の息子という出自がからんでいます」

将来の可能性を閉ざされた孤独な存在に、オスターマイアーは目を向ける。

「カミュの小説『異邦人』（1942）を思い出して下さい。フランスの植民地だったアルジェリアでムルソーに殺される被害者は、〈アラブ人〉としか呼ばれません※2。74年後にルイが〈他者〉の立場のレダに、名前とアイデンティティを与えた小説は、ヨーロッパ文学が古い習慣を脱した証（あかし）ともいえます」

Photo:Arno Declair ©schaubühne

俳優の力強い演技と、映像が融け合う新鮮な表現

Photo:Arno Declair ©schaubühne

殺されかけトラウマを負ったエドゥアールは、警察官と姉の対応に更なる衝撃を受ける。

「警官はレダの出自を蔑む。故郷では排外主義政党が勢力を伸ばし、姉は弟がゲイであることにも向き合えない。誰にも助けを期待できないエドゥアールは、傷をいやすためにトルコに赴くと人々の顔にレダの面影を見て脅（おび）えます」

ここでオスターマイアーは微笑み、「けれども苦痛だけではなく、ときめきもあふれる芝居ですよ」と説く。

「レダによる盗難に気づく前は、愛の物語でもあります。エドゥアールはレダに魅了されたから、自室に入れてしまった。コミュニケーションが成り立つ場面は美しい。心の通い合いも、エロティックな交流も陶酔を誘うでしょう」

起伏に富むドラマに新鮮な表現をもたらすのは、複数の役を兼ねる俳優の名演と大スクリーン。例えば、姉の夫役（クリストフ・ガヴェンダ）が警察官、エドゥアールの母等を演じる中、風刺的な誇張が促す笑いは、臨場感を盛り上げる映像で増幅される。

いっぽうレダ役の俳優（レナート・シュッフ）の黄色いベスト姿は、典型的な労働者のいでたち。それはフランスで多くの負傷者を出している政府への抗議活動、いわゆる“ジレ・ジョーヌ（黄色いベスト）運動”を連想させた。

「黄色いベストを着た人々のデモは本作発表後に起こった運動ですが、最近パリで私はデモ隊と警察の衝突を撮影しました」

オスターマイアーが開いたスマートホンには、「自由、博愛、平等」を象徴する三色旗を掲げるデモ隊の画像が並ぶ。

「今、自由はグローバル企業には許されても、個人にとっては幻想にすぎません。世の不公平を減らす知恵も、いろいろな環境の人と舞台を共有しつつ育てたいですね」

文：桂真菜（舞踊・演劇評論家）

※1 イプセン作「ノラ（人形の家）」（2005年来日、世田谷パブリックシアター）と「民衆の敵」（2018年来日、静岡芸術劇場）を現代化した作品（共にシャウビューネ制作）も喝采を浴びた。
※2 カミュ作『異邦人』をアルジェリア人の視点から読み直す、カメル・ダーウド（1970〜）による小説『もうひとつの『異邦人』 ムルソー再捜査』（2013）の翻訳が今年、水声社より刊行。

フランスの作家エドゥアール・ルイ（1992〜）は『暴力の歴史』（2016）を、同性愛者である自身の体験を基に著した。パリに住む主人公エドゥアールは、冬の夜に移民二世の美青年レダに誘惑され、自宅に招く。親密に過ごした後、携帯が消えたことにエドゥアールが気づくと、レダは暴力をふるって去る。後日この事件を伝えたところ、警官も故郷の姉も人種差別を露わにする。エドゥアールはトラウマから逃れるため、トルコに旅立つが……。

「暴力の歴史」　詳細はHPへ

10月24日（木）〜26日（土）　プレイハウス

原作：エドゥアール・ルイ　演出：トーマス・オスターマイアー

東京芸術祭2019公式サイト tokyo-festival.jp/2019

東京芸術祭 2019 Tokyo Festival 2019